

沖縄戦語り部に質問次々

次世代継承ワークショップ

学生ら取材記事化

高校生と大学生が沖縄戦の語り部にインタビューして記事を書く「次世代継承ワークショップ」が5日、那覇市内であり、15人が参加した。第32軍司令部壕の保存・公開を求める会長瀬名波榮喜さん(95)が沖縄戦に巻き込まれる1940年代から32軍壕の保存に取り組み現代までの半生をひもといた。「人間は国も時代も隔てず同じ。自分でよく考えることを大事にしてほしい」と語った。

(社会部・吉田伸)



沖縄戦の語り部の瀬名波榮喜さん(左)に、語り継ぎたいことについて尋ねる大学生や高校生=5日、那覇市首里石嶺町・県総合福祉センター

瀬名波さん「考えること大事に」

1月に事前学習をこなして、質問を多数用意してきた若者を前にした瀬名波さん。「戦争体験者が次々と亡くなり、どう継承するかという問題に直面している。将来を背負って立つ皆さんに平和がどれほど素晴らしいか伝えられるほど素晴らしいことはない」と切り出した。

軍事教練は断れなかったのかとの質問に、瀬名波さんは「死は鴻毛(こうもう)より軽し」と言われ、あの時代に『命こそ宝』はなかった」と答えた。質問した首里高2年の本村由奈さんは「今では考えられない」と言葉を失い、「瀬名波さんが経験したことを理解して次世代に伝えられるようまどめた」と話した。

瀬名波さんは米国留学時代、現地の友人に「日本軍の特攻隊はアホだ」と批判され「われわれは天皇を神格化してしまっただが、あなた方はキリストを神格化して多くの人を殺してきた」と反論したことも明かした。

首里高2年の新迫みちるさんは「なぜ32軍壕の保存にかかわろうと思ったのか」と問うた。瀬名波さんは「沖縄戦の震源地。作戦、戦術全てそこで計画された」と話し、「90代の私が

話せる時間は少なく、皆さんもいずれこの世から消える。32軍壕を永遠の語り部として残しておきたい」と訴えた。

県の沖縄平和啓発プロジェクト「御万人びー」の一環。参加者はそれぞれ記事を執筆する。